

この人

日タイ修好120周年記念で競技かるたを実演した

読み手が百人一首の数文字を読んだだけで、目にも止まらぬ速さでかるたを取る……というより「叩き飛ばす」。

バンコクには日タイ修好120周年記念イベントのため、国際交流基金の招待で訪れた。01年にロンドンで開催された頭脳スポーツオリンピック以来、2回目の海外公演だ。

「日本語の勉強に熱心なことに驚きました。イギリスでは、かるたを見て、へーという感じ。それがタイでは本当に学んでみたいという意欲が伝わってきて感動しました」

競技かるたには東大入学後、サークルで出会った。「はじめた時は、純心に札を速く取ることが面白

かった。勝負に勝ったり負けたり、大学対抗戦で日本一になることが目的でした」

かるたに取り付かれて15年。今では製菓会社に研究員として勤める傍ら、全日本かるた協会広報部の協力部員として草の根レベルの普及活動に携わっ



競技かるた5段 小林 好真 さん
こばやし よしまさ

になり、競技者の人口も増えているという。かるたには意外な効用もあることが分かった。

小林さんが被験者になって医学的に調べた結果、耳で音を聞いて、素早く体を動かしてかるたを取るといった一連の反射運動によって脳全体が活性化していたのだ。

「かるたはボケ防止につながるんです」
後継者を現う競技かるたの全盛期は30歳くらいと言われるらしい。そのピークを過ぎつつある今、将来の夢も出てきた。

「10年後、20年後には、かるたの文学的価値も研究したいですね」

藤原定家が1235年に選んだ百首の和歌をもとにするかるたには長い歴史が刻まれている。確かに、叩き飛ばすだけではもったいないな。
(水谷昇 記者)